

未来の教会史 1

ジェイコブ・プラッシュ

だれもが未来を知りたいと思っています。このために人は占い師やオカルトなど、さまざまのところに行き未来がどうなるかを知ろうとします。しかしながら、イエスさまは私たちに未来を告げました。

私は信者になる前、よくまじない師のところに行き、タロットカードを読んでもらっていました。そのまじない師はカードを読むのが得意で、彼女はある日、私がイエスを信じるようになることをカードをもって言い当てました。その人はカードを見て「これが起こったときに戻ってきて、私を火あぶりにしないでおくれ。これは確かだが、戻ってきて火あぶりにだけはしないでおくれ」と言い始めました。彼女のまじないはかなり正確でした。オカルトは未来を予測することにおいて、とても正確であることがあり得ます。しかしながら申命記 18 章を読むと、“かなり正確”でもそれは十分ではないということが分かります。預言者は**毎回、寸分違わず**正しくなければならぬのです。現代には多くの人が自分は預言者だと主張し、自分中心の預言の奉仕を立ち上げますが、彼らは起こりもしない奇妙な予測を立てます。それが起こったとき、人々にはせ預言者を弁護して言います、「この人はだいたい正しいじゃないか」。それはそうかもしれませんが、ニュージャージーでタロットカードを読んでいたまじない師もだいたい正しかったのです。申命記 18 章は非常に明快です。主の御名によって語ったことが実現しなければその人はにせ預言者なのです（申命記 18 章 20 節－23 節）。主の御名によって語るのはとても危険なことです。その“預言”が神からのものでなければ語らずに、口を閉じておいたほうが良いのです。聖霊を消すことをしてはいけません、その言葉が本当に聖霊からのものであれば実現せずにいることはありません。

私は本当の預言者を目撃する機会がありました。イスラエルのカルメル山にある一室に 40 人くらいの人と、（当時の呼び名でいう）ソビエト連邦から来た男性がいました。当時はイスラエルとソ連の間に外交関係や直通の飛行機もなく、その人はヨーロッパを經由して来ることしかできませんでした。その人はテル・アビブに降り立ち、誰かがベン・グリオン空港に迎えに行き、ガラリヤまで連れてきました。その人は英語で話し始め、預言や予告をし始めたのです。彼が話しているのを聞いたとき、私はこの男が本当の預言者か、またはにせ預言者であるだけでなく、頭がおかしいに違いないと思いました。この紳士は一冊の本を書き、その中で赤の広場（モスクワの都心部にある広場）で主の聖餐式をすること

について語っていました。その人が言うには、赤の広場で立ち上がった後、神は聖餐式の杯をモスクワ川に投げ込むように言われ、ソ連政府が教会を迫害しユダヤ人にイスラエルへ移住することを禁止したために、神はエジプトにしたのと同じことをソ連にも行うと予告していたというのです。その人たちは「わたしの民を行かせよ」また「わたしの福音を宣べ伝えさせよ」、さもなければ神はあなたの帝国を滅ぼすと宣言していました。「私たちはあなたの地にのろいを宣言する——神はあなたの地をのろわれる」その後まもなくチェルノブイリ原発事故があり、ソ連が経験した中で最悪の収穫期を迎えました。そのクリスチャンたちはまた「神はソ連の戦争兵器を破壊される」と言いました。その直後、ソ連はアフガニスタンから引き上げ、ワルシャワ条約機構（ソ連を盟主とした東ヨーロッパの軍事同盟）が解体しました。次にその信者たちは、レーニンが永久的にミイラ化され展示されてある墓に向かって、「これは死をもたらす霊だ。神はレーニン崇拜を崩壊させる」と言いました。当時、ソ連にはレーニンの像や胸像だけを製造する工場が 11 ほどありました。その後、夜のニュースで、その工場がひとつ残らず閉鎖され、レーニンの像の首が切り落とされているのを私たちは見ました。その後、その信者たちはクレムリン宮殿の方を向き、言ったのです「神はあなたの帝国を滅ぼされる。ソ連は崩壊し、誰も信じることができないほど神は迅速に裁きを下される。『わたしの民を行かせよ。そしてわたしの福音を宣べ伝えさせよ』」

このようなことを 1984 年や 85 年に言うことは不可解なことで、全く考えられないことでした。神から本当にそのことを聞いたのでなければ、ただ気が狂っているだけでした。しかし、そう語ることが突飛であったにもかかわらず、語られた言葉はみな現実となったのです。私はそれからその兄弟に会うことも、彼の本を読んだこともありませんが、私はその人が言ったことと自分の目の前で起きたことを知っています。

そういった出来事の後、私は聖書学校に通うためにイギリスに行き、カリフォルニアのカンザスシティから来た人たちに会いました。彼らは自分たちをカンザスシティの預言者・ヴィンヤードと名乗っていました。その人たちは何万人もの聴衆の前に立ち、1990 年 10 月に大きなリバイバルが起き、偉大な“後の雨”がやってくると予告しました。その“大きなリバイバル”から数年たち、イングランドには教会よりも多くのモスクが建造され続けています。

教会への侵入

申命記 18 章にはにせ預言者は“ネヴィー・シェカル (*nebi shekar*) ”であると書かれてあります。にせ預言者たちはもはや石打ちの刑に処せられることはありませんが、偽りの預言をするという罪は同じくらい深刻なものです。エレミヤ 5 章と 28 章はにせ預言者がどのよ

うなものであるかを明らかにして、イエスも終わりの日ににせ預言者たちが現れると語られました。新生したクリスチャンが犯してしまう大きな間違いのひとつは次のことです。マタイ 24 章やルカ 21 章のオリーブ山での教えを読むとき、イエスさまがにせ教師やにせ預言者が現れると 4 回言われたのを見て、私たちのほとんどは機械的に「これはエホバの証人や統一教会、モルモン教（末日聖徒キリスト教会）、クリシュナ教団、クリスチャン・サイエンスなどのことだ」と言ってしまうことです。確かにこのような人たちがにせ預言者、にせ教師であることに疑問の余地はなく、過去 100 年間でのカルトの急増自体が終わりの日のしるしであり、私たちが生きている時代を象徴しているものですが、マタイ 24 章、ルカ 21 章、使徒 20 章、マタイ 7 章をその文脈にそって読むと、これらのカルトはイエスや使徒たちが警告していたにせ預言者、にせ教師とは違っていたことが分かります。イエスや使徒たちが警告していたのは、選ばれた者を欺こうとする者たちです。

未信者はすでに悪魔に欺かれています。悪魔は 2 種類の人たちを欺こうと躍起になっているのです。それは国としてのイスラエルと聖書に信頼する教会です。国としてのイスラエルは霊的な暗闇の中にいます。エルサレムを含む多くの場所、ロンドンのスタンフォード・ヒルやブルックリンのクラウン・ハイツにはイスラエル人の看板が立ててあり、そこには「私たちは今こそメシアを待望する」と書かれてあります。イエスはヨハネの福音書で、民はメシアを受け入れないが自分の名によって来る者を信じると二重の予告をされました（ヨハネ 5 章 43 節）。これはシモン・バル・コクバの時代の初代教会において成就されましたが、明かにこれは自分のことをユダヤ人にメシアだと信じさせる反キリストの象徴でもあります。ユダヤ人は反キリストの到来のために手はずを整えられているのです。

したがって悪魔はこの世とユダヤ人を騙してしまいました。今悪魔はどのような人を欺こうとしているのでしょうか。あなたと私です。マタイ 7 章、使徒 20 章、マタイ 24 章、ルカ 21 章を読んでみてください。これらの箇所警告されているにせ教師やにせ預言者とは、教会内に入り込んできて選ばれた者を騙そうとする者たちのことです。

私はモルモン教やエホバの証人などのカルトの問題を懸念しています。それは新生したクリスチャンが、偽りに対してカルトが持つ熱意と同じほどの熱意を持っていれば、多くの人がそのようなものに入ることがなく、むしろ救われるからです。聖書を信じる教会が何もしない一方で、カルト団体が偽りのために熱心であるという状況は、ラオデキヤの教会の特徴です。西洋の教会はラオデキヤのようになってしまいました。しかしながら、クリスチャンでモルモン教徒やエホバの証人に騙される人は限られています。騙されるような人は信じて間もないときに羊のようにさらわれたか、最初から弱く、やっかいな信者なのでしょう。これらのカルトを、未信者に警告する責任を私たちは持っていますが、第一に心配すべきにせ預言者ではありません。私たちが気を配らなくてはならないのは、教会に

忍び込んでくる者たちです。霊的な欺きは終わりの日に増加します。

ユダヤ的観点からの聖書解釈

“カル・バ・ホメル (*kol ve homer*)”とってユダヤ的観点から導き出された聖書の原則があります。これを日本語で表わすと「軽いものから重いものへ (軽から重へ)」という意味です。これはラビ・ヒレルのミドロットの最初の原則で、ヒレルとはラビ・ガマリエルの祖父であった人物です。ラビ・ガマリエル (使徒 5 章 34 節) は使徒パウロがラビになったときの教師でした。ラビ・ヒレルは 7 つのミドロット、つまり聖書を解釈する原則を考案しました。新約聖書はこの原則を繰り返し用いています。“カル・バ・ホメル”つまり“軽いものから重いものへ”という原則はこのうちの最初のもので、これを用いている箇所がヘブル 10 章 25 節です。

『ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。』(ヘブル 10 章 25 節)

さして重要ではない (軽い) 状況において真実なことは、重要な (重い) 状況において特に真実になります。この箇所では交わりの問題が取り上げられています。交わりはいつであっても重要ですが、終わりの日において**特別に**重要なものとなるのです。私たちが共に立ちあがることができなければ、迫害が来たときにひとりで立つことはできません。

終わりの日に関して“軽いものから重いものへ”という原則が使われているもうひとつの例は、にせ預言者とにせ教師についての箇所です。彼らはいつの時代にも存在します——これが“軽い”です。しかし終わりの日に彼らの数は増えます——これが“重い”です。常に真実であることは終わりの日に**特に**真実になり、教会にとって常に危険なものは終わりの日に特に危険となります。

イエスの時代のユダヤ人は私たちがしている方法で聖書を解釈しませんでした。イエスはラビであって、他のラビと同じ方法で教えました。イエスはミドラッシュを用いていたのです。イエスはまた“マシャル・ニムシャル形式”というものも使いました。マシャルとは日常生活、また自然などを描写したもので、ニムシャルとはその背後にある霊的な意味です。箴言はヘブライ語で“ミシュレー”と呼ばれ、マシャルの本という意味です。例を挙げると、箴言 11 章 22 節には『美しいが、たしなみのない女は』というのがニムシャルで『金の輪が豚の鼻にあるようだ』とありこれがマシャルです。たとえば単にマシャルを延長したもののなのです。

西洋の寓喩と予型の考え方は基本的に西洋風に作り直されたものなのです。私たちはユダヤ人の聖書の考え方を理解する必要があります。それはダニエル 12 章 9 節にこう書かれているからです。

『このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ』（ダニエル 12 章 9 節）

人が黙示録について本を書き、黙示録の内容をすべて解明したというときは気を付けてください。ダニエル書ではっきりと言われているのは、これらのことは終わりの時まで封じられているということです。何か新しい真理や、新しい啓示が与えられるのではありません。聖霊は終わりの日に聖書の奥深い内容について、神の民に理解を与えます。私たちに何か新しい教理や、新しい真理、新しい啓示が与えられるのではなく、聖書の中にすでに書かれてあることに関して、より深くより明らかな理解が与えられるのです。リベラル（自由主義神学者）がしていることは、聖書をその“シツ・イム・レベン (*Sitz im leben*)”＝“文化的背景”から切り離して解釈することです。福音主義者たちも同じことをしています。なぜならギリシア的な解釈法また積義を使い、ユダヤ的な本を理解しようとしているからです。この問題について話すべきことがたくさんありますが、終わりの日に注目して、最も重要な点をみなさんに知ってもらいたいと思います。

聖書の預言は実際どのように成就するのか

西洋プロテスタントがとる預言解釈の方法は、“過去主義 (*Preterism*)”、“歴史主義 (*Historicism*)”、“激励主義 (*Poemicism*)”、“未来主義 (*Futurism*)”この 4 つのうちの一つです。

リベラルは“過去主義”に傾倒しています。彼らは「神はいない、いたとしても未来は知らない。もし知っていたとしてもイザヤに未来を告げることは確実でない」と言います。それゆえ、クロス王に関することがその 200 年前にイザヤによって預言されると、リベラルの頭の中では自動的に、それが起こった後にイザヤが書いたか、イザヤ書がイザヤではない誰かに捕囚の後に書かれたと考えるのです。こうした考え方の基盤は、イザヤはクロス王のことを 200 年前に知っていた可能性はないというものです。神学用語でいうならこれは“バチカン補間法 (*ex-Vaticana interpolation*)”というものです。リベラルは未来に関しての超自然的な知識を信じることができないので、過去主義を容認しています。

第二のものは“歴史主義”であり、これは神の国がもう到来したと信じる人たちが好むもので

す。改革者たちもまたこの考え方にひどく傾倒していました。歴史主義は「新約聖書の終末に関する預言は、初代教会の時代に完全に成就した」と信じるものです。初代教会はローマをバビロンと認識していました。ペテロは最初に書いた書簡を閉じる際、『バビロンにいる、...婦人がよろしくと言っています。』（1ペテロ 5章13節）と書きました。バビロンにおいてニムロデが始めた偽りの宗教は、小アジアに行き渡り（特にペルガモの町へ）、そこからギリシア・ローマ文化へ浸透しました。そこからローマ・カトリックやフリーメーソンなどの宗教が発生しました。しかしながらそのルーツはすべて、この世の偽りの宗教と腐敗した政治制度が組み合わさったバビロンに行き着きます。

バビロン人は第一神殿を“ティシャーベ・アブ (*Tisha' b'Av*)”、ヘブライ暦でのおおよそ8月9日に破壊しました。ほぼ同じような状況で、ローマ帝国の軍隊は第二神殿を同じ日付に破壊しました。その日も“ティシャーベ・アブ”でした。このため初代の信者たちはローマをバビロンであると認識し始めたのです。どちらも同じ偽りの宗教でした。

このことを説明するために私がよく使う例は“スコットランドヤード”です。スコットランドヤードという名は、ロンドンでホワイトホール（通りの名前）とビクトリア・エンバンクメント（テムズ川の近くにあるもの）の間にあった小さな通りの名前で、元々ロンドン警視庁の本部があった場所です。現在の警視庁はシャーロック・ホームズの時代と違い、ビクトリア駅から800メートル離れた場所に位置しています。しかしそれがもうホワイトホールのそばの小さな通りに位置していないにもかかわらず、本部はいまだに“スコットランドヤード”と呼ばれています。言い換えれば、施設の名前が本来の場所の名前を取ってしまったのです。バビロンに関しても同じことがいえます。このため黙示録に書かれてあるように、初代教会が7つの丘の上にいる女を見たとき、カピトリーナという名を冠していましたが、その女がひとつの町を表しているということから、彼らにとってローマはバビロンだったのです（黙示録17章9節）。

それゆえ皇帝ネロの統治下にローマが火に包まれたとき、それはイザヤとエレミヤによって預言されていたバビロンの崩壊の成就だったのです。このように初代の信者たちは考えていました。またベスビオ火山が噴火したとき（ポンペイが灰に埋もれ）、火山灰が電離圏と成層圏の上部に滞留し、ローマ帝国全体に太陽と月の光が届かなくなりました。これは実際に起こった出来事です。このようなことが最後に起こったのは1960年代のアイスランドだったと思います。次におよそ紀元70年頃、神殿が破壊され、ローマ人たちは神殿の丘に異教の像を建て、その場で礼拝しました。当時のクリスチャンたちはそれが“荒らす憎むべき者”——ハシキューツィム・ハメショムム——であると考えていました。こうしてこれらの預言は成就したのです。これが歴史主義という考え方です。

プロテスタントの改革者たちは歴史主義に傾倒していました。なぜなら中世の教皇の権威が拡大することを防いだのは、ローマ帝国、帝政ローマであったと主張していたからです。コンスタンティヌス帝が首都をコンスタンティノープルに移し、西ゴート族が移住してきからローマ教会は繁栄しました。『彼がその定められた時に現われるようにと、いま引き止めているものがある』(2テサロニケ 2章6節)とあるように、改革者たちはローマ帝国がローマ教皇の権威を制限しており、後になってその制限は取り去られたと解釈しました。このために神の国はもう到来したという人たちは、“終わりの日”はただ紀元70年に至るまでの出来事を指すと言い、多くの場合、黙示録の記述に未来のことが書かれているとは考えません。

預言解釈の第三の手法は“激励主義”です。激励主義とは「黙示録は迫害の時代に生きているクリスチャンを励ますためだけに与えられたものであり、迫害されているクリスチャンに与えられるべき栄光と、迫害する者への裁きを思い起こさせることによって、勇気を与えようとして書かれたものである」というものです。これは的を射ています。黙示録はこれを読む者は幸いであるという言葉とともに始まり、黙示文学はどれも迫害下にある教会を励ますものです。部分的にその目的は正しいのですが、それが唯一の目的ではありません。

預言を解釈する第四の手法は“未来主義”であり、これはこのような出来事が終わりの日に起こるというものです。

どの方法が正しいのか？

プロテスタントの解釈を使う西洋の異邦人的な思考によると（ここではふれませんが、多くの理由によりこれはギリシア的な起源を持ちます）、この4つの手法のうちどれが正しいものかと考えます。問題はどれを支持するかということになります。あなたは過去主義、歴史主義、激励主義または未来主義のどれを支持するでしょうか。紀元1世紀のユダヤ人なら、イエスがそうであったように、これら**4つすべて**を同時に支持することでしょう。

マタイ 24章15節から33節で、イエスはダニエルによって語られた“荒らす憎むべきもの”が現れるのを見たなら、終わりが近いと言われました。ここで問題になるのが、マタイ 24章やルカ 21章のオリーブ山の訓戒で語られた、荒らす憎むべきものはイエスが語られる以前に出現していたということです。イエスはヨハネ 10章で“ハヌカ”、宮きよめの祭りを祝っておられました。イエスはアンティオコス・エピファネス (B.C.215-164 セレウコス朝シリアの王) が神殿に偶像を建て、神殿内で豚をほふり、その神殿をマカベア家が再び聖めたことなどすべてを知っていました。ダニエルによって預言された荒らす憎むべきもの

は旧約新約間の時代に**すでに**登場していましたが、イエスはその預言を指し、それが**もう一度起こる**と言われました。イエスは過去主義を用いたのです。イエスは過去の出来事を指し、それを未来形で話されました。

次に歴史主義です。もう一度、イエスがオリーブ山で預言された荒らす憎むべきものについて見ていきましょう。ヨセフを読み、ローマ人がどのように神殿を破壊し、神殿の丘に異教の象徴を建て、礼拝したかを読むと、それが荒らす憎むべきものであったことが分かります。その後、2世紀にハドリアヌス帝はアエリア・カピトリーナという町を作り、神殿の丘にジュピター（ローマ神話の神）の神殿を建造しました。それがもうひとつの荒らす憎むべきものでした。コンスタンティヌスの甥であった背教者ユリアヌスは、ローマ帝国を再び異教化しようと試み、神殿を建て、神殿の丘で多くの不審火が起きました。これが**もうひとつの**荒らす憎むべきものです。現在の神殿の丘では、オマール・モスク、岩のドームがあります。その外面にはコーランのスラーからの引用が刻まれています。それは「神には子がない」という意味です。これもまた**もうひとつの**荒らす憎むべきものです。

しかし来るべき荒らす憎むべきものが**未だに**存在します。すでに現れたものすべては、来るべきものを象徴しています。大事な点はこれです。西洋的な預言の考え方は預言が予告と成就とでなっているというものです。しかしヘブライ的な預言の考え方は、預言を反復するパターンと見なします。ひとつの最終的な成就と共に複数の成就があると、ヘブライ的な預言は考えられています。そしてそれぞれ複数の成就は、最終的な成就の予型であり、最終的な成就がどのようになるかを教えているのです。

もうひとつの例を挙げましょう。マタイがイエス降誕の記述を書いたとき、ホセア 11 章 1 節から『わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した』と引用しました。問題になるのがそのホセア 11 章を読んでみると、ホセアはモーセの指導のもとエジプトを出たイスラエルの民のこと、出エジプトに関して語っているということです。しかしマタイは一見したところ、その文脈を全く無視し、イエスに当てはめているように見えます。しかしながら、本当の問題はマタイが文脈を無視したということではなく、西洋の教会がユダヤ人の本を取り、自分たちで文脈を読みとる方法を作ってしまったことにあります。マタイはミドラッシュを用いて考え、預言を**パターン**だと見なしていました。これを説明しましょう。

ミドラッシュ

それはアブラハムから始まります。創世記において、神はパロをさばき、アブラハムはその子孫と共にエジプトを出ました。アブラハムは原型であり、すべて信じる者の父です。

後になって出エジプト記において、神はパロをさばき——邪悪な王をさばき——再びアブラハムの子孫はエジプトを出ました。このようにパターンは始まります。イスラエルに起こったことは最初アブラハムに起こったことの繰り返しなのです。アブラハムがパロから富を得たように、イスラエル人は出エジプト記においてエジプト人から富をはぎ取りました。

次に、イエスがエジプトから出た後、また邪悪な王——今回はヘロデ——がさばかれました。ミドラッシュ的にイスラエルはイエスを隠喩として表しています。聖書の中で「イスラエルはわが栄光、イスラエルはわが長子」という箇所を見つけたなら、それはミドラッシュ的にメシアをほのめかしています。これはラビでさえも知っています。それゆえ、イスラエルの現れであるイエスもエジプトを出たのです。

教会がキリストの体であるのと同じように、ある意味においてイスラエルもキリストの体です。そして1コリント10章に書いてあるように、私たちもエジプトを出ます！エジプトはこの世の象徴、またパロはこの世の神である悪魔の象徴です。またモーセが山に昇り、民の代わりに血で契約を結んだように、イエスも同じことをしました。モーセがイスラエルの子らをエジプトから導き出し、水の中を通して、約束の地に導いたように、イエスは私たちをこの世から導き出し、バプテスマを通して、天へと導かれます。一方が他方の象徴となっています。私たちはみな出エジプトの経験を持っています。

しかし出エジプトの最終的な意味は、教会の復活と携挙です。出エジプト記で行われたのと同じさばきが黙示録でも繰り返されます。またモーセとアロンのしるしをパロの呪法師たちが真似たのと同じように、反キリストとにせ預言者はイエスとその証人たちの奇跡を真似ることができるでしょう。黙示録ではなぜモーセの歌（“主に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに”）が歌われているのでしょうか（出エジプト15章1節、黙示録15章3節）。出エジプト記が示しているのは、パロの敗北は悪魔の敗北の予型であるということです。またなぜイスラエル人は自分たちの所有物に先立ってヨセフの遺骸を運んだのでしょうか。それは1テサロニケ4章16節から17節に書いてあるように「キリストにある死者が、まず初めによみがえる」からです。そして私たちも共にエジプトから出ます。

もう一度いいます。ヘブライ的な預言の考え方は反復されるパターンです。それはひとつの予告ではなく、最終的な成就をともなったパターンです。これがヘブライ的な終末に関する預言の概念です。終わりの日に関して書かれてある聖書の教えを本当に理解するためには、まず西洋的、異邦人的、ギリシア的な考え方をやめて、初代教会のやり方に倣って聖書について考え始めなくてはなりません。黙示録2章・3章にでてくるエペソの教会

には他の教会にはない燭台が出てきたことを思い出してください（2章5節）。

『あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。』（詩篇 119 篇 105 節）

マタイでのたとえ話に出てくるおとめたちは、夜を照らすためにともしびの中に油が必要でした（マタイ 25 章 1 節－13 節）。この話には後で戻ってきます。

終りの日には聖書の理解と忠実さはとても重要なものとなります。マタイ 25 章の賢いおとめはともしびに油があったために、夜でも見ることができたのを覚えているでしょうか。これは聖書を理解するための聖霊の照明です。ラオデキヤの教会は目が見えるようになるため、目に塗る目薬を必要としていました（黙示録 3 章 18 節）。終わりの日には、みことばの理解は忠実さと密接に関係してくるでしょう。ダニエル書には悪者はひとりも悟ることがないと書かれています（ダニエル 12 章 10 節）。ところで純粋な心を持ち、空っぽの頭をしている人に知恵を与えるのは神にとってたやすいことです。しかしながら、頭でっかちで知性を誇っている人に純粋な心を与えるのは容易ではありません。霊とまことが必要です。神は私たちにどちらも持っていてほしいのです。単純な人は教養のある人より救われやすい傾向があります。しかし救われた後には、単純だった人はそのままでいることはよくありません。

神の時間の枠組み

さて、これらのことを頭に入れながら、マタイ 10 章を見てみましょう。1 節から、

『イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやすためであった。さて、十二使徒の名は次のとおりである。まず、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、熱心党员シモンとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。』

“イスカリオテ・ユダ”という名がどのような意味か知っているでしょうか。“郊外居住者ユダ”という意味です。5 節から続きます、

『イエスは、この十二人を遣わし、そのとき彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行ってはいけません。サマリヤ人の町に入ってはいけません。イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい。行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。

病人をいやし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊を追い出しなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。胴巻に金貨や銀貨や銅貨を入れてはいけません。旅行用の袋も、二枚目の下着も、くつも、杖も持たずに行きなさい。働く者が食べ物を与えられるのは当然だからです。どんな町や村に入っても、そこでだれが適当な人かを調べて、そこを立ち去るまで、その人のところにとどまりなさい。その家に入るときには、平安を祈るあいさつをしなさい。その家がそれにふさわしい家なら、その平安はきっとその家に来るし、もし、ふさわしい家でないなら、その平安はあなたがたのところに戻って来ます。もしだれも、あなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家またはその町を出て行くときに、あなたがたの足のちりを払い落としなさい。まことに、あなたがたに告げます。さばきの日には、ソドムとゴモラの地でも、その町よりはまだ罰が軽いのです。

いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを議会に引き渡し、会堂でむち打ちますから。また、あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしをするためです。人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に立ち逆らって、彼らを死なせます。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。彼らがこの町であなたがたを迫害するなら、次の町にのがれなさい。というわけは、確かなことをあなたがたに告げるのですが、人の子が来るときまでに、あなたがたは決してイスラエルの町々を巡り尽くせないからです。弟子はその師にまさらず、しもべはその主人にまさりません。』(マタイ 10章1節-24節)

イエスが弟子たちを二人ずつで遣わされたとき、彼らはイエスの名のために総督たちや王たちの前に連れて行かれたでしょうか。いいえ。マタイ 10章において裁判の中で聖霊が言うべきことを教えてくださったでしょうか。いいえ。兄弟が兄弟を死に渡し、親は子を死に渡したでしょうか。いいえ。イエスが弟子たちを二人ずつで遣わされたとき、イエスの名のためにすべての国々に嫌われたでしょうか。いいえ。そのときはどれも起こりませんでした。イエスは弟子たちを訓練しておられました。その前はバプテスマのヨハネが彼らを訓練したのです。今イエスは彼らを最初の予行演習に出して、「これらのことが起こる」

と言われたのに何も実現しませんでした。何が起きていたかという、16 節でイエスは時間枠を完全に変えて話していたのです。

今日、再建主義者といって、イエス・キリストのために全世界を征服し、再臨の前に神の国を建て上げようと主張する人たちがいます。その人たちはこれらの預言が初代教会で成就し、自分たちが勝ち誇る教会になるべきであるなどと言います。これは完全にくだらないことです。神の国は今存在していますが、まだ来ていません。2 種類の用語があります。ひとつは“開始された終末論 (*inaugural eschatology*)” というもので、もうひとつは“実現された終末論 (*over-realized eschatology*)” です。

“開始された終末論” とは神の国はもう挿入されていて、サタンの力は覆されており、サタンが勝利を収める可能性はないが、最終的な勝利はキリストの再臨までやって来ないというものです。ダニエル 7 章 21 節を見てみましょう。

『私が見ていると、その角は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝った。しかし、それは年を経た方が来られるまでのことであって、いと高き方の聖徒たちのために、さばきが行なわれ、聖徒たちが国を受け継ぐ時が来た。』(ダニエル 7 章 21 節-22 節)

この箇所はマカベア家の話を再現しています。したがって、再建主義者たちはこの箇所はマカベア家や初代教会において成就され、私たちの時代が神の国なのだと言います。これが“実現された終末論”であり、全くの誤りの教理です。将来に背教が起こり、迫害があり、反キリストが登場するのです。教会は勝利を得ます、しかしその勝利はイエスの再臨にかかっているのです。

十字架の問題

マタイ 10 章に書かれてあるもうひとつのことは、私たちが総督や王の前に連れて行かれ、イエス・キリストの名のために迫害を受けること、またしもべはその主人にまさることはないということです。

私の友人に、救われる以前 20 年間もクリスチャン・サイエンスに関わっていた人がいます。E・W・ケニオンは、クリスチャン・サイエンスの創始者メアリー・ベーカー・エディ (1821-1910) から影響を受けたと認めています。ケニオンの「私の体は嘘を付いている」という一連の考えは、クリスチャン・サイエンスから出てきたものであって、クリスチャン・サイエンスは医学を信頼していません。ケネス・コーブランドやケネス・ヘーゲンらの教

えの多くはケニオンから譲り受けたものであり、そのケニオンは自分の教えを確かにクリスチャン・サイエンスから得ました。

カルトや、キリストの福音を歪めた教えはすべて、例外なしに何らかの形でイエスの十字架を否定します。エホバの証人は十字架のことを十字架と呼ぶことさえ好まず、“苦しみの杭”と呼びます。そしてエホバの証人たちは救いが彼らの組織を通して、また組織への個人の献身を通してもたらされると主張しています。

これはローマ・カトリックとも同じことです。イエスは十字架上で「完了した」と言われました。しかしローマ・カトリックはミサがカルバリの丘でささげられたのと同じいけにえであり、繰り返しささげられるものだと言います。ローマ・カトリックはイエスの十字架を根本的に否定しています。偽りの宗教です。カトリックの中には本当の信者がいるかもしれませんが、本当の信者ならそこから出てくる必要があります。そのような教えを信じ、参加しながらも神のみこころのうちにいることはできません。

また“イエスは霊的に死んだ”と主張するお金目当ての説教者たちがいます。ケネス・コーブランド、ケネス・ヘーゲン、E・W・ケニオンら、またその支持者たちは、イエスが勝利を得たのは十字架上ではなく、地獄に行きサタンとひとつの存在になったときであると主張しています。このようなことを彼らは教えていて、十字架を根本的に否定しています。その結果としてどのようなことが起こってしまうのでしょうか？『しもべはその主人にまさりません』（マタイ 10 章 24 節）と書かれてあるように、イエスの十字架がその奉仕において見下されているために、十字架に付けられた生活は自分たちにとって重要ではなくなってしまいます。その代わりに「あなたが金持ちになることを神さまは望んでいる。決して病気にはかからない。神さまはあなたにあれやこれを所有してほしい」ということが教えられているのです。十字架はその方程式から取り除かれています。

そうです、この世にあるすべての歪められたキリスト教は、何らかの形でイエスの十字架を否定します。それと反対にパウロは「十字架を誇りとする」と書いています。昔書かれた賛美歌の中でも——直訳では「私は荒削りの古い十字架にしがみつくと、そしてかの日に冠と交換する」（新聖歌 108 番）とあるように、私たちはその日に冠を与られます。この世にいるときではありません。“神の国は今ここに”という教えはこれを否定し、今こそ冠を受けるときだと主張します。聖書が語っているのは神の国は今ありますが、**まだ来ていない**ということです。しかし“神の国は今ここに”の支持者たちは**今こそ**が神の国だと言うのです。

現在から未来へと切り替える

根本的な問題に戻りましょう。マタイ 10 章でイエスは使徒たちを遣わし、これらのことが起こると言って警告しましたが何も起こりませんでした。マタイ 24 章を見てみましょう。イエスは 1 節から 4 節まで神殿について語っています。イエスはダニエル 9 章の預言について語っており、メシアは第二神殿が崩壊する前に来て、死ななければならないということを説明していました。その後、イエスは使徒たちの生涯で起こる出来事や、神殿の崩壊について語りました。イエスはここでもマタイ 10 章でしていたのと同じこと—会話の真ん中で時間枠を切り替えていたのです。マタイ 24 章も同じで—紀元 70 年についてのことを話していたと思えば、すぐに時間枠を切り替え、この世の終わりについて語っていたのです。これはもちろん、マタイ 25 章の預言を含んでいます。

同じことが使徒 2 章、聖霊が降り注ぎペテロがそのことについて説明しているときに見られます。ペテロは使徒 2 章 15 節でヨエル 2 章を引用しています。

『今は朝の九時ですから、あなたがたの思っているようにこの人たちは酔っているのではありません。これは、預言者ヨエルによって語られた事です。』

『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。
すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。
その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。
すると、彼らは預言する。』

ペンテコステの日に預言は語られたのでしょうか？語られませんでした。 19 節から

『また、わたしは、上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるしを示す。それは、血と火と立ち上る煙である。主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。』(使徒 2 章 15 節-20 節)

天と地に不思議なわざが示され、血や火や煙がペンテコステの日にあったのでしょうか？ありませんでした。太陽はやみとなり、月は血に変わったのでしょうか？これも起こりませんでした。太陽は御子であるイエスの象徴であることを思い出してください。イザヤにこうあります、

『起きよ。光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているからだ。』(イザヤ 60 章 1 節)

四福音書すべてにおいて、イエスがよみがえったのは日の出のときであったと記してあります。太陽(sun)が昇ることは、御子(Son)が復活することの隠喩です。これに対して月は自ら光を放ってはいません。月はただ太陽から受けた光を反射します。これは教会がそのうちに何の光も持っていないが、イエスの光を反射することと同じです。私は聖書に書いてあるような天体現象が起こることを否定しているのではありません。私が言おうとしているのは、それが起こるときには、より深い事柄をただ反映しているにすぎないということです。地上にある教会にはイエスの光がもはや届かなくなり、教会は血で染まる——つまり迫害されます。私は文字通りの天体現象が起こらないと言っているのではありません。ただこのたとえの意味を理解しなければならないと言っているのです。21 節、

『しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』（使徒 2 章 21 節）

これはペテロの“カリグマ”と呼ばれていて、ギリシア語では文字通り“これはそのようになる”と書かれています。

そうです、マタイ 10 章でイエスが使徒を二人組で遣わし、彼らに対して起こると言われたことは実現しませんでした。マタイ 24 章においても、イエスは教会に対して起こることを告げましたが、当時の教会では完全に成就せず、ただ部分的に成就しただけでした。また使徒 2 章でペテロはこれから起ころうとしていることを告げましたが、どれも実現しませんでした。

では違った点からマタイ 10 章を見てみましょう。これらのことは誰に対して実現するのでしょうか。イエスは二人ずつ使徒を遣わし、彼らが総督や王に引き渡され、迫害されて、聖霊が言うべきことを教えてくれること、また家族にも裏切られるが、最後まで耐え忍ぶ者は救われることを語りました。これらのことはマタイ 10 章の使徒たちには起こりませんでした。しかしこれは誰に対して実現したのでしょうか。これらのことはすべてイエスに対して実現しました。イエスの生涯の終りに起こったことは、私たちの教会の終りの日に起こります。私たちは統治者や王の前に連れて行かれ、人々は互いに裏切り合うが、最後まで耐え忍ぶ者が救われるのです。これらのことがイエスに起こったように、私たちにも同じように起こります。

再現され始める

一方でまた違った事柄があります。使徒の働きのはじめのほうで、これらのことは使徒たちに起こりました。使徒 4 章 18 節から 23 節を見てみましょう。

『そこで彼らを呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」そこで、彼らはふたりをさらにおどしたうえで、釈放した。それはみなのが、この出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、ふたりを罰するすべがなかったからである。この奇蹟によっていやされた男は四十歳余りであった。釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。』(使徒 4 章 18 節-23 節)

ここで使徒たちが総督や王たちの前に引き渡され、会堂で非難され、聖霊によって誰も反論することのできない言葉を語りました。そして使徒 4 章 25 節から 26 節において彼らは詩篇 2 篇から続けて引用しました。

『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』(使徒 4 章 25 節-26 節)

聖書は終わりの日における、この世から教会への迫害を多くの箇所騒ぎ立つ海として表現しています。

詩篇 2 篇はイエスに対して起こりました。異邦人たちは立ち、主と油注がれた者に対して反抗したのです。今度は使徒の働きでそれが教会に対して行われています。このようなパターンは増加していきます。使徒 5 章 19 節から 25 節を見てみましょう。

『ところが、夜、主の使いが牢の戸を開き、彼らを連れ出し、「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばを、ことごとく語りなさい」と言った。彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間たちは集まって来て、議会とイスラエル人のすべての長老を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を獄舎にやった。ところが役人たちが行ってみると、牢の中には彼らがいなかったので、引き返してこう報告した。「獄舎は完全にしまっており、番人たちが戸口に立っていましたが、あけてみると、中にはだれもおりませんでした。」宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞いて、いったいこれはどうなって行くのかと、使徒たちのことで当惑した。そこへ、ある人がやって来て、「大変です。あなたがたが牢に入れた人たちが、宮の中に立って、人々を教えています」と告げた。』(使徒 5 章 19 節-25 節)

この内容は非常に分かりやすいものです。マタイ 27 章 65 節を見てみましょう。

『ピラトは「番兵を出してやるから、行ってできるだけ番をさせるがよい」と彼らに言った。そこで、彼らは行って、石に封印をし、番兵が墓の番をした。』（マタイ 27 章 65 節－66 節）

マタイ 28 章 11 節から 14 節まではイエスが復活された後のことを書いています。

『女たちが行き着かないうちに、もう、数人の番兵が都に来て、起こった事を全部、祭司長たちに報告した。そこで、祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』と言うのだ。もし、このことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。』（マタイ 28 章 11 節－14 節）

こう見てみると分かるのが、イエスが墓から御使いによって導き出されたように、使徒たちも御使いによって牢から連れ出されたのです。また祭司長たちが使徒 5 章 26 節で人々を恐れていたことは、ルカ 22 章 2 節と同じことなのです。

もう一度繰り返しますが、マタイ 10 章においてイエスは使徒たちを二人ずつお遣わしになり、起こると言われたことは彼らにはその時起こりませんでした。しかしそれはまずイエスの身に**起こった**のであって、**その後**使徒たちや初代教会に起こり始めました。そこから分かるのがイエスに起こったことと、初代教会に起こったことは、また繰り返されるのであって、私たちに対しても起こることなのです。しかしどうしてそう言えるのでしょうか。またマタイ 10 章 17 節から見てください。

『人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを議会に引き渡し、会堂でむち打ちますから。また、あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしをするためです。人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に立ち逆らって、彼らを死なせます。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。』（マタイ 10 章 17 節－22a 節）

これらのことはマタイ 10 章では起こりませんでした。またルカ 21 章 12 節を見てみましょう。

『しかし、これらのすべてのことの前には、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。』（ルカ 21 章 12 節）

ここで「これらすべてのことの前には」と書かれてあることに注目しましょう。教会は終わりが到来する前に迫害を受けるのです。13 節からつづけて読むと、

『それはあなたがたのあかしをする機会となります。それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。しかしあなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにまで裏切られます。中には殺される者もあり、わたしの名のために、みなの方に憎まれます。しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。』（ルカ 21 章 12 節－19 節）

再び次の節から紀元 70 年のことへと時間枠は移ります。マタイ 10 章で予告されたことはその時成就しませんでした。それはイエスに対して起こり、また使徒たちと初代教会とに対して起こり、再び終わりの日にある教会に対して起ころうとしているのです。イエスは同じ言葉を使っています。私が意図的にルカの箇所を読んだのは、その考え方をしているのはマタイだけではないということを示すためでした。聖霊はルカの福音書にも同じことを啓示したのです。

しかし、これからこのミドラッシュはさらに目立つようになります。私たちが使徒の働きを読むとき理解しなければならないことは、それはただ 1 世紀の教会史を読んでいるのではなく、終わりの時代の教会史を読んでいるということなのです。

最初はキリストに、次はパウロに

ヨハネ 19 章 4 節から 6 節において、ラビたちはイエスに冤罪を着せ、ローマの権威に引き渡しました。この箇所においてポンテオ・ピラトはイエスを裁こうとする意思はありませんでした。これが始まりです。パウロの奉仕とその生涯の終わりの期間は、イエスの生涯の終わりに起こったことを繰り返しています。パウロにはラビたちによってあらぬ罪の訴

えがローマ人支配者に出されていましたが、使徒 18 章 12 節から 18 節においてローマ総督もパウロを裁こうとする意思はありませんでした。イエスに対して起こったことはパウロに対しても起こったのです。

マルコ 14 章 12 節から 15 節では、逮捕される時に先立って、イエスは弟子たちと過越の時期に上の部屋で会い、パンを割きました。使徒 20 章 6 節から 8 節でパウロは彼の弟子たちと上の部屋で会い、捕われの身になる前にパンを割きました。

ヨハネ 10 章 15 節とマルコ 10 章 32 節から 34 節で、イエスのご自分の死を神のみこころだと受け入れ、付き従っている者に自分の死を予告しました。使徒 20 章 24 節から 25 節では、パウロは全く同じことをしました。

ヨハネ 11 章 8 節では、イエスの弟子たちは命の危険が迫っていることを思って、イエスにユダヤに行かないよう説得しようとしていました。使徒 21 章 11 節から 13 節では、パウロの弟子たちもパウロの命を助けるために、エルサレムに下って行かないように説得を試みしました。

マタイ 7 章 15 節や 24 章 11 節、マルコ 13 章 6 節、ルカ 21 章 18 節などはイエスが去った後現れて羊を襲う狼についての警告であり、イエスはその警告を弟子たちとの 3 年間の関係が終わるときに与えられました。使徒 20 章 29 節から 30 節でパウロは、3 年目の終わりに弟子たちの中に起こるにせ預言者について警告を与えました。

マルコ 15 章 12 節から 15 節やヨハネ 19 章 15 節、ルカ 23 章 21 節、マタイ 27 章 21 節から 23 節などは、ラビたちに扇動された群衆がイエスの死を求めて叫んだことを記していますが、使徒 21 章 36 節と 22 章 22 節では、ラビたちに扇動された後、群衆がパウロの死を求めていました。

マタイ 26 章 59 節から 61 節ではラビたちがイエスに対して偽証をつかもうとしていたことを記してあり、イエスは律法と神殿に逆らうことを教えたとしてあらぬ罪を着せられました。使徒 21 章 28 節ではパウロにも同じことが起こったと記されています——ラビたちはパウロが律法と神殿に逆らうことを教えていると彼に罪を着せました。

ルカ 23 章 8 節ではイエスがローマ市民政府の興味を引き、好奇心を起こさせたように、使徒 22 章 30 節ではパウロもローマ市民政府の興味を引き、好奇心を起こさせました。このことが終わりの日にも起こるのです。政府は、私たちが他の人と何が違うのかを不思議に思い、初代教会に対してそうであったようにクリスチャンを好奇の目で見つめます。

ヨハネ 19 章とマタイ 27 章において、ローマ政府はイエスを釈放しようとした。しかしイエスを釈放できないと分かると、無罪だと知っていながら、問題すべてをラビの権威へ委ねました。使徒 22 章 30 節と 18 章 15 節で同じことがパウロにも起きました。

マタイ 27 章 24 節ではローマ政府がイエスの件で暴動が起こるのを懸念して、仲裁することを余儀なくされました。使徒 23 章 10 節と 21 章 34 節から 36 節では、ローマ政府がパウロに関して暴動が起きるのを防ぐため、仲裁に入らなければならなかったことが記されています。

マタイ 26 章 4 節でラビたちがイエスを殺す策略を立てていたとき、ローマ総督はカイザリヤからエルサレムに下ってきました。同じような状況下でローマの地方総督はパウロの裁判を行うためにカイザリヤからエルサレムに下ってきました。使徒 23 章 12 節、21 節。

イエスはユダヤ人の兄弟によって異邦人と総督の手に渡されました。これはルカ 18 章 32 節、ルカ 23 章 1 節、マタイ 27 章 2 節に見られる具体的な預言に関する成就でした。パウロも具体的な預言の成就として、同じ境遇を味わいました。

ヨハネ 18 章 22 節でイエスは大祭司への話し方のために平手で打たれました。使徒 23 章 2 節ではパウロも同じ理由で打たれそうになりました。

マタイ 23 章 27 節でイエスは宗教的な偽善者のことを「白く塗った墓」と呼び、ペサハ（逾越）の時期に白塗りにされる墓のことをほのめかしていました。使徒 23 章 3 節でパウロは大祭司に向かって「白く塗った壁」と言いました。

イエスはルカ 20 章 26 節から 40 節で、パリサイ人とサドカイ人が一緒に向かってきたときに、復活の話題を使って彼らを巧みに操りました。使徒 23 章 9 節でパウロも同じ戦略を使いました。

“ユダヤ人が 2 人いれば、3 つの意見が出てくる”という冗談を聞いたことがあるでしょうか。それは“ピルプル (*pilpul*)”として知られるものから来た言い回しです。“ピルプル”とはラビたちの議論法で、どんな意見や立場でも正当化したり、批判するために使われ、他のラビたちに関して注解をしているラビの権威をいくらかでも引用するものです。これは議論のための議論であり、イエスはピルプルと関わりを持ちませんでした。山上の説教が終わったときに、群衆はイエスが律法学者やパリサイ人のようではなく、権威のある者のように教えられるのに驚いたとある箇所は、イエスが“ピルプル”と関わりを持たなかったという意味

です。イエスは率直に「こうである」とだけ言われ、当時のラビや現代のリベラルたちがしているような神学論争やあらさがしはしませんでした。しかしひとつだけ例外があります。イエスはこれをパリサイ人とサドカイ人の間で論争を引き起こすために用いました。パウロも同じように、パリサイ人とサドカイ人の間に内輪もめを起こさせる目的以外にはピルプルを用いませんでした。

もう一度確認します。マタイ 10 章はイエスが語られたときには成就しませんでした。最初イエスに対して実現し、次に使徒たち、また非常にはっきりとパウロに対して起こりました——私がここに載せた以上に関連した箇所はあります。またマタイ 24 章とルカ 21 章を読むとそれが私たちにも起こることであると分かります。イエスに対して起こったことは初代教会に起こり、そのふたつの例が共に私たちに対して起こることが何かを教えているのです。ユダヤ的な預言は反復されるパターンです。複数の成就があり、それぞれの成就が**最終的な**成就に関することを示しています。私たちの結末を知りたいのなら、イエスの結末を見てください。終わりの時代の教会に何が起こるかを知りたいのなら、1 世紀の教会に起こったことを見るのです。

ヘブライ暦の象徴

そうです、私たちが使徒の働きを読むとき、それはただ過去の歴史を読んでいるだけではなく、未来の歴史をも読んでいるのです。初代教会は、春の雨と関連して、力強い聖霊の降り注ぎを経験しました。ヘブライ語の“マイム・ハイーム”つまり“生きた水”は聖霊の呼び名でもあります。雨が注がれることは聖霊が降り注ぐことの象徴です。イスラエルには春の雨と秋の雨（後の雨と前の雨）があります。初代教会に力強い聖霊の降り注ぎがあったように、終わりの日の教会にも力強い聖霊の降り注ぎがあります。これが初代教会に豊富な賜物が与えられ、終わりの日にもそれが復活することのひとつの理由です。そしてこれはイスラエルの雨期と関係があります。現在、再び大量のユダヤ人が救われているのもこのためなのです。収穫が来ています。

イエスはイスラエルの春の例祭を最初の到来において成就しました。過越の祭りはほふられる過越の子羊として、初穂の祭りは復活の初穂として、ペンテコステはイエスが聖霊を使徒たちに与えたときに成就されました。これらが春の例祭であり、春の雨が降り収穫を備えるときなのです。長く暑い夏は異邦人教会の時代と関連があり、その後イエスは再臨において秋の例祭を成就されます。秋に 2 度目の雨季が始まり、もうひとつの収穫期が来ます。使徒 2 章で引用されたヨエル 2 章は、はっきりと初代教会に見られたものが終わりの日に繰り返されると語っています。

このことは“賜物終結論 (*Cessationism*)” (御霊の賜物が初代教会で終わったとする説) の誤りに対する最も力強い論拠のひとつです。これを信じる人が間違っている、御霊の賜物は使徒とともに終わり、もう見られることはないという教えは、その対極にある“カリスマニア”と同じくらい極端なものです。真実はその中間にあります。御霊の賜物は初代教会に見られ、終わりの日の教会にも御霊の注ぎはあり、再び同じことが見られるのです。

聖霊の降り注ぎはしるしと不思議がその後に行きました。使徒 2 章 16 節から 21 節は、終わりの日の聖霊の降り注ぎもまたしるしと不思議がそれに続くことを予告しています。しかし残念なことに、聖霊の降り注ぎとその結果であるしるしと不思議の後には、間違った教理や経験主義の神学、肉欲、霊的な賜物の誤用が続いていました——1 コリントを読んでみてください。今日ではどのようなことが起こっているのでしょうか。御霊の賜物の後には、経験主義の神学や肉欲、性的不品行、与え主と賜物を置き換える人々、おかしい教理が続いています。初代教会が抱えていたのとそっくり同じ問題があります。

モーセの律法がクリスチャンとどのように関連しているかということが、使徒 15 章とガラテヤ 5 章において、初期ユダヤ人信者の間での対立的な問題となりました。また再び、メシアニック・ジューの間でその問題が起きています。過去 15 年間のうちに何万人ものユダヤ人が救われていて、初代教会の時代にあったのと同じ問題を私たちは今抱えています。

福音の動向

初代教会の時代に知られていた世界はローマ帝国や地中海を越えませんでした。しかし使徒 17 章 6 節を読むと、福音が当時の世界をひっくりかえしたことが分かります。マタイ 24 章 14 節では終りの日に神がもう一度地を震わせると主張されています。福音が地の果てまで宣べ伝えられることにより、神はもう一度地を震わせるのです。

韓国のように仏教徒が多数を占める国が、ひと世代のうちにキリストに立ち返ったことを私たちは目撃しています。地球上で最もイスラム教徒が多い国であったインドネシアでは、毎年 100 万から 200 万人ものイスラム教徒がムハンマドに背を向けて、キリストに自分たちの命をゆだねています。福音とキリスト教が西洋世界では衰える一方、発展途上国では急速に拡大しています。また福音はプロテスタント系の国々では衰え、ローマ・カトリック系の国々で爆発的に広がっています。そして異邦人が自分たちに与えられた真理と恵みを拒むにつれて、ユダヤ人が戻ってきているのです。

初代教会において、使徒 1 章 8 節で見られるように、神はユダヤ人を用いて異邦人に福音を届けました。おそらく黙示録 7 章、また確実にローマ 11 章で『彼らの受け入れられるこ

とは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう』とあることを取り違えてはいけません。神はユダヤ人を通して教会に恵みを与えようとされています。神はユダヤ人を用いて異邦人に福音を伝えようともされているのです。ちょうど1世紀にユダヤ人を用いて異邦人に福音を届けたように、終わりには神は異邦人を用いて福音をユダヤ人のところへ戻されます。それがなされると、神はユダヤ人信者を用いて教会を祝福されます。

反ユダヤ主義の復興

使徒 19 章 33 節、34 節を見ると、初代教会の時代には反ユダヤ主義が勃興していたことが分かります。終わりの日には、私たちは再び反ユダヤ主義が勃興するのを見るでしょう。聖書の中で神に選ばれた者と呼ばれている2種類の人たちは、ユダヤ人と新生したクリスチャンです。このことはすべて創世記 3 章で、神が蛇に向かって、蛇と女の間、蛇の子孫と女の子孫との間に敵意を置くと言われたときにさかのぼります。反ユダヤ主義と教会への迫害はコインの裏と表のような関係です。そのふたつを区別することはできますが、引き離すことはできません。

イスラム教徒はどの人たちを最も嫌っているのでしょうか。ユダヤ人と新生したクリスチャンです。鉄のカーテンの背後にいた共産主義者たちはどのような人たちを一番迫害したのでしょうか。ユダヤ人とクリスチャンです。ローマ・カトリック教会が何世紀にもわたって十字軍や異端審問、大虐殺などで迫害したのはどのような人たちだったのでしょうか。ユダヤ人と新生したクリスチャンです。ロシア正教会が一番迫害したのはどのような人たちだったのでしょうか。これもユダヤ人と新生したクリスチャンです。

すべては初代教会にさかのぼります。ローマ政府は教会と敵対した後に、ユダヤ人に牙をむきました。それが紀元 70 年に、また紀元 120 年から 132 年のバル・コホバの反乱で起こったことであり、確実に終わりの日に反キリストがなすことでもあります。反キリストは私たち教会に敵対し、次にユダヤ人に向かっていくでしょう。反ユダヤ主義は広まり、今でさえ、ある再建主義者たちによってそれは教会の中に入り込んで来ています。

マルティン・ルターは、間違いなく神の人でした。しかし彼が行きついた末路はひどく衝撃的なものでした。ルターは、農民の背を刺して殺し、ユダヤ人は囲いの中に集められて、ナイフの刃を突き付けてキリストを告白させなければならぬと言い、ドイツ人は自分たちがクリスチャンであることを証明するために、ユダヤ人を殺さなければ非難されるべきだと主張しました。このようなことが現代の教会に再び忍び込んできているのです。

ユダヤ人を滅ぼそうとした腐敗した政治家たちは、いつもそれを神学的に正当化するため

クリュソストモスやルターのような人たちから引用してきました。現代も同じ状況が起きている。私たちの時代に出版されたいくつかの本を読んでみてください。たとえば『Whose Promised Land?』（約束の地は誰のものか）や『Blood Brother』（血を流した兄弟）などはイスラエルに対してひどい偏見を抱いています。人々はイスラエルに対しての憎しみを正当化し、神がユダヤ人のために抱いている終りの時代の目的を否定する奉仕者たちを見出そうとして、彼らは成功しているのです。しかし神がこの世を贖う計画は最終的にはイスラエルの贖いにかかっています。預言によると神がこの世を救われる計画はイスラエルの救いの計画と密接な関わりがあるのです。イスラエルは神の日時計です。これはユダヤ人の地位が高いとか、すぐれているとかいう意味ではありません。それでもなおイスラエルが神の日時計であることに変わりはないのです。

ローマの復興

ダニエル 7 章 19 節と 20 節、黙示録 17 章 9 節——ローマは初代教会の時代の世界を支配していました。私は確信を持って言えるのですが、ダニエル書の第 4 の獣はローマ帝国が再編されたものになるでしょう。まだローマは終焉に至っていません。欧州評議会はローマ条約によって創設されました。私たちが覚えておかなければならないことは、ローマ皇帝はローマのパンテオン神殿のかしらであったということです。ローマ皇帝に向かってひざまずいている限り、人はどのような神でも信奉することができました。ヘブライ語で“礼拝する”と“ひざまずく”という言葉は同じ単語——“ヒスタカボト (*Histachavot*)”といいます。ローマ・カトリック教徒がマリア像の前でひざまずくとき、それは偶像礼拝の行為なのです。

皇帝を筆頭としてパンテオン神殿に入ってきたすべての神は、皇帝を全宗教と政治の霊的な指導者と認めている限り、人々はどのような神でも拝むことを許されました。皇帝は“ポンティフィカス・マキシマス (*Pontificus Maximus*)”すなわち“ポンティフ (*Pontiff*)”と呼ばれていました。コンスタンティヌス帝が首都をコンスタンティノーブルに移してから、教皇はポンティフの名を名乗りました。教皇とポンティフは結局同じものになり——異教に物を贈る神がいたので、ポンティフはそれを聖ニコラウスと呼ぶことを決め、異教に愛の神がいたために、それを聖ウァレンティヌス (バレンタイン) と名付けました。アルテミスやミネルヴァなどすべて他の女神はマリアになりました。実質的にローマ・カトリックは同じ偽りの宗教のままなのです。これが終わりの日に再び起こることです。(ポンティフとは実際、橋渡しという意味です。この場合はさまざまな文化と宗教の仲介者となるということ)

ローマ人たちには公認宗教 (*religio licita*) と非公認宗教 (*religio illicita*) がありました。

公認された宗教はポンティフを指導者として認めている限り、許されていました。皇帝にひざまづくことを拒んだ非公認の宗教、最終的にこの分類に入る唯一の宗教は私たちの宗教です。ポンティフはキリスト教を非難しました。教皇ヨハネ・パウロ2世は、チベットの仏教徒たちから神として崇拝されているダライ・ラマと会見しました。教皇はゾロアスター教の祭司、まじない師、イスラム教のイマーム、正統派のラビ、カンタベリー大主教などとも会見し、すべての宗教を尊敬していると言い、神として崇拝されているダライ・ラマを“偉大な霊的指導者”として認めました！これが反キリストです。教皇はこの人たちにただ自分をポンティフとして認めるように要求しただけでした。

しかしながら、ポンティフであるヨハネ・パウロ2世が認めなかった宗教がひとつだけあります。7年前にボリビアで、また今から1年も昔ではないサントドミンゴ（ドミニカ共和国の首都）でこの教皇は新生したクリスチャンを“貪欲な狼たち”と呼びました。彼の中にも公認宗教と非公認宗教があります。私たちの宗教を除いてすべての宗教は彼にとって都合なのです。これがポンティフが2千年前にしていたことであり、今も彼がしていることなのです。

ギリシア語での反キリストという言葉を見ると、それはただ“キリストに対して”という意味だけではなく、“キリストの代わりに”という意味を持っています。教皇のラテン語での称号は“ヴィカリアス・クリストス (*Vicarius Christus*)”、キリストの代理人というものです。“キリストの代理人”をギリシア語に訳すと“アンティクリストス (*antichristos*)”つまり反キリストとなります。

これが初代教会において起こっていたことであり、現在にも共通していることです。教皇ヨハネ・パウロ2世はひとつに統合されたヨーロッパにひとつの教会を望んでいると言いました。教皇は同盟を結んだヨーロッパがひとつしか共通に持っているものがないことをとてもよく知っています。それはローマ・カトリックです。聖公会は消え失せて、ローマのもとに下って行きつつあります。カンタベリー大主教であるジョージ・ケアリーは『*The Meeting of Waters*』（融合）という本を書き、聖公会が教皇の権威のもとに入ることを促しています。ヨーロッパ全域で、違った言語、違った文化、違った遺産を受け継いでいる人たちをひとつにできるのはローマ・カトリックであると教皇は知っています。彼はひとつのヨーロッパにひとつの教会ができることを望んでいるのです。言い換えると、16世紀また宗教改革以前にあったものに戻ろうとしているのです。ポンティフは初代信者たちに向かってきました。そして今のポンティフが自分のしたいことを行うのなら——今その通りにしていますが——再び私たちに敵対するのです。救われたカトリック信者はバビロンから脱出する必要があります。

初代教会の時代には、多神教のローマは世界中の偽りの宗教の神殿となっていました。ローマが関わっているインターフェイス会談を見ると、確信を持って私が言えるのがローマ。その会談は何らかの形で世界の偽りの宗教が集まったもの、そして最後には政治体制と組み合わさったものとなるでしょう。偽りの宗教は信者を迫害しました。使徒 19 章 23 節－29 節ではアルテミス礼拝に基づく具体例が示されています。現代では世界中にマリア礼拝で同じことがあります。マリア自身は救い主が必要だと言ったにも関わらず（ルカ 1 章 47 節）、ローマ・カトリックはそれを否定し、彼女を拝んでいます。

マリアは今までに存在した女性の中で最も偉大な人でした。ヘブライ語で“神の力強い者”という名前の意味を持つ御使いガブリエルはマリアに言いました。

『あなたはどの女よりも祝福された方です』（ルカ 1 章 28 節）

最も偉大な女性は自分自身についてどう語ったでしょうか。

『わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。』（ルカ 1 章 46 節－47 節）

マリアは「私には救い主が必要だ」と言いました。しかしながらローマはこれを否定し、マリアが胎の中から原罪を持っていなかったと主張します。このようなことはローマの中で頻繁に見られるようになります。